



No. 5 2

令和2年10月20日
発行 多治見市教育研究所

URL: <http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/>
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でも
ご覧いただけます。

巻頭言

I君との出会い

多治見市教育委員会 副教育長 河本 英樹

私が初任者の頃の話です。私は小学校に勤務し、4年生を担当しました。その学級にはI君という児童が在籍していました。彼は、帽子を被っていないと落ち着けない児童でした。教室の中でも決して帽子を脱ぐことはせず、赤白帽子を被るとき以外はずっと黄色の安全帽子を被って生活をしていました。周りの児童は前年度までに彼のことを知っていましたから、新しい学級の仲間となっても帽子を被っていることについて受け入れていました。私だけが違和感をもち、I君に帽子を脱ぐように促しました。しかし、彼は「帽子を脱ぐと頭が痛くなる」と言って絶対に脱ごうとはしません。周りの先輩先生に相談すると、「無理に脱がそうとすることはしない方がよい」と助言をもらいました。保護者の方に伺ってもやはり「無理に脱がせないでください。」と言われました。

それ以来、私も無理に帽子を脱がせることはせず、日々が過ぎていきましたが、それでも私の中にはずっと違和感がありました。

ある日、体育で跳び箱の授業を行いました。学級の目標を「全員が4段を跳べるようになる」とし、全員で一生懸命取り組みました。（この目標が適切だったかどうかは分かりません。）

はじめは、跳べなかった子も次第に跳べるようになり、学級に笑顔が増えました。単元が終わるときには、I君を除いては全員が跳べるようになっていました。

私の中では、はじめに立てた学級の目標が達成できなかったことが心残りでしたが、誰一人手を抜くことなく真剣に取り組んだことを評価し、子どもたちの頑張りを認めました。

ただ、I君が達成せずに単元を終えてしまうことがどうしても気になり、I君に「どうする？先生と休み時間に練習する？」と尋ね

てみました。すると彼は「うん。」とうなずきました。彼の本当の気持ちは分かりませんでした。が、昼休みを使っての練習が始まりました。練習が始まって数日後、体育館に学級の仲間が2、3人入ってきて一緒になって跳んだり、応援をしたりし始めました。

それから数日後、彼はついに跳ぶことができたのです。

ずいぶん昔の話なので、その時の彼の表情などははっきりとは覚えていませんが、体育館にいた数人の仲間と一緒に喜び合ったのを覚えています。そして、学級全員で喜びを分かち合いました。

私にとっては、この出来事が教師としてのやりがいを感じる「はじめの一步」だったように思います。

I君とは3年間の付き合いになりました。卒業する頃に、I君のお母さんが「息子が授業中、伝えたいことをうまく伝えることができず、困っていた時に先生が、『I君の言おうとしていることはよくわかったよ。』と言ってくれたことが、とてもうれしかったみたいです。」と話してくださいました。

そんなかわりを続けたせいか、彼は卒業までに、黄色の安全帽子を脱ぐことができるようになりました。

卒業以来、I君とは一度も会ってはいません。しかし、自分の歩みを振り返る時には必ず思い出す一人として、大切な存在になっています。

しばらくは、「私が彼を支えた。」などと自負の対象としていました。しかし近頃は、こうして出会った人たちに私自身が励まされて歩いてきているのではないかと思うようになりました。



令和2年度 教師塾セミナー

1 今年度の現状

今年度、新型コロナウイルスの影響で夏休みの教師塾セミナーは原則中止となった。

前年度から計画をしていた「子どもの体力・スポーツ格差に関する実証的研究」の講座のみ、7月29日にオンラインで研修を実施した。

2 「子どもの体力・スポーツ格差に関する実証的研究」～格差社会における子どもの体力・スポーツ～について

(1) 講師（研修方法）

筑波大学の清水紀宏教授 オンラインによる研修（共同研究者として、岐阜大学の春日晃章教授、名古屋学院大学の中野貴博教授が出席）

(2) 研修者

市内小・中学校、幼稚園 各1名

(3) 主な講話内容

①問題提起

- ・スポーツに関係する現象の中にも、様々な「差」や「違い」が確認できる。「差」は単なる差として放置してよいか、それとも制度・政策や組織的努力によって社会的に縮小・改善させるべき「許されざる格差」「不平等」なのか？

②多治見市のデータ分析より

- ・多治見市は世帯収入の低収入家庭が少なく、中流層が多い。どの収入階層においてもスポーツの重要性を感じている家庭が多い。
- ・「世帯収入」が高いと「学力」も高い傾向にあり「学力格差」は確かにある。
- ・「学力」と「体力」の関係においては、学力の低い子は体力も低い。この傾向は学年進行とともに強くなる。
- ・“スポーツ”はどのくらい必要だと親たちは考えているか。
子どもにとっては「クラスの人気者」の

とらえている。

- ・運動・スポーツの機会と体力の習得は密接に関連している。
- ・世帯収入、スポーツ投資額による体力格差が、性別にかかわらず幼児期から認められた。特に低・中学年の格差が大きい。

③「格差」対策をどうしたらよいか？

☆体力・スポーツ格差は学校と行政によって縮小できる。

- ・エフェクティブスクール（効果のある学校）の研究
- *最低習得基準（このぐらいの点数はとってほしいという期待水準）を設定し、その通過率を求めていく。
- ・公教育としての学校体育（園も含む）の質保障
 - ア 教科体育の平等性の確保（学校間・学級間格差の是正）
 - イ 休み時間の有効活用（各教室に運動用具を配備）
 - ウ 運動部加入率の向上と平等性の確保



3 研修を終えて（研修後アンケートより）

- ・改めて幼児期の運動に対する大切さを感じた。現在も「いきいき運動」として取り組みを行っている。毎日の積み重ねの大切さと保護者へのアピールが今後に生きてくることを再度確認でき、地道に積み重ねていきたい。
- ・子どものスポーツ格差に対して、何となく思っていたことをデータとして示してもらって明確に理解することができた。

土曜学習「わがまち 多治見大好き講座」
9月 わがまち多治見の現代陶芸を学ぶ

「多治見に愛着をもち、誇りに思う大人に育ってほしい」という願いのもと、土曜学習「わがまち 多治見大好き講座」が開講され、今年では6年目を迎えます。本年度は、第1回目を9月12日に開催し、34名の児童が多治見の主要産業である陶磁器について学びました。開催に当たっては、8名の退職教員の先生にサポーターをお願いし、18名の中学生にボランティアとして働いてもらいました。会場は、セラミックパーク MINO とその中にある岐阜県現代陶芸美術館です。

現代陶芸美術館では、学芸員さんや美術館ボランティアの方の案内で陶芸作品を鑑賞したり、普段は入ることができないバックヤードの見学をしたりしました。この美術館は、展示室全体を吊って揺れにくくしてあると聞き、その構造に大勢の子が驚きました。

セラミックパーク MINO では、転写による絵付けを体験しました。転写シートを切り、水にぬらして貼り付けるという細かな作業でしたが、中学生ボランティアに手伝ってもらいながら思い思いの作品を仕上げることができました。



今回も、講師の方々をはじめ、サポーターの先生方、中学生ボランティアの人たちに大変お世話になりました。おかげで、参加者は、楽しみながら陶磁器への理解を深め、多治見のよさにふれることができました。

また、密を避けるため、受講者だけでなく、中学生ボランティアも人数を減らして募集したところ、50名という定員をはるかに超える申し込みがありました。誰かのために自分も力になりたいと考える中学生が大勢いることを大変頼もしく思いました。

第64回多治見市科学作品展

9月5日・6日に、バロー文化ホールで「第64回多治見市科学作品展」を開催しました。



今年度は、コロナの影響で例年よりも短い夏休みでしたが、何か月も前から長期に渡って取り組んだ研究作品など、市内の多くの子供たちが科学研究に挑戦しました。今回の作品展には、その内、53点の出品がありました。日常生活で生まれた疑問について、自分なりに工夫した方法で解決しようとする作品ばかりでした。

作品展当日は、両日合わせて245名の来場者があり、子供たちの作品一つ一つに多くの方が関心を寄せていました。

参観者の感想

- 長い期間をかけて観察記録をしていてすごいと思った。身近な生き物の特性など分かって面白かったです。自分の飼育している魚や昆虫も研究の対象になると分かり、頑張ってみようと思いました。(小学生)
- 模型、写真、グラフ、絵など、様々なまとめ方をした作品があって面白かった。また、動機や目標がはっきりとしている作品はとても見やすかった。刺激になったので、自分も頑張りたい。(中学生)
- 他の学年の子の作品を見ることができ、とても勉強になりました。どんなことを皆、研究をしているのか、また、来年はどんな研究をしようか、楽しみができました。(大人)

市の金賞受賞作品15点は、科学作品東濃地区審査会に出品され、その内、9点が県展(中央展)出品作品に選ばれました。

今年度、新規に採用された先生方の紹介

「率先垂範」

小泉中学校 橋本 拓幸



こんな言葉が日本には受け継がれています。「子どもは親の言うことを3割までしか身に付けない。だが、親の行うことは7割以上身に付けてしまう」。つまり、親の説教で子どもが変わるのではなく、

親の背中を見て子どもは変わるということです。私は教師ですので、この言葉の「親」を「教師」に置き換えて、この3か月間生活してきました。すなわち、言葉より行動です。「先生ほど生徒より掃除をする先生はいません。」と子どもに言われました。子どもの先を生きる者として、模範になる言動を取ろうと私が意識してやってきたことです。子どもに要求することは、まず自分がやる。子どもより「ありがとう」を言う。子どもより「時間」を守る。子どもより「授業」を楽しむ。口先だけの教師ではなく、今後も子どもと一緒に汗をかく教師を目指します。

「新たな自分」

多治見中学校 加藤 一矢



中学校が再開されてから三か月が経ちました。これから始まる新しい生活に希望と胸を膨らませると同時に、身の引き締まる思いで生徒の前に立った着任式の日のことを、今でも鮮明に覚えています。

毎日のように生徒と関わる中で、一人一人のよさや個性が見えてきました。学年副担任として多くの生徒と積極的に関わり、元気をもらったり与えたりしています。日々の授業では、思い通りにいかないこともあります。先生も生徒も楽しく学べるような授業を目指して、生徒の気持ちに寄り添った指導や授業づくりを頑張っています。

まだまだ分からないことばかりで、たくさんの先生方に支えてもらいながら、毎日学び続けています。私も周りの先生方を支えていけるように、これまで以上に自分から行動を起こし、進んで動けるようにしたいです。また、多くの先生方からもご指導を賜り、自分自身としても成長できる一年にしたいです。

「児童とともに過ごした3か月」

脇之島小学校 杉原 悠里



学校が再開して約3か月が経ちました。この3か月間養護教諭として過ごして、児童たちが元気に登下校できることが養護教諭の最大の幸せだと感じています。行事がなくなったり、学校生活に制限がかかっていたり

と、例年とは違う年になってしまいました。しかし、この3か月間を無事に過ごすことができてほっとしています。

保健指導をしたり、保健室の掲示物を変えたりするのですが、予測できないような児童の素直な反応が返ってくる場合があります。毎回どのような反応が返ってくるか楽しみになっています。保健室の掲示物をきっかけに健康に興味をもってくれることもあるため、これからも続けていきたいです。

自分が今できることは何かを考える毎日です。納得いく答えが出ずに落ち込むこともありますが、児童たちの笑顔のために頑張ります。

「温かさを忘れず」

市之倉小学校 藤木 優衣



「先生は優しいし、すぐに笑ってくれるから好き！」これは、ある日、私が児童からかけられた一言です。この言葉を私は嬉しく感じたと同時に、児童は、私が見せている表情をよく見ているのだということも感じました。

また、校内の先生方や、市内の養護教諭の先生方にも大変お世話になっています。どんなことを尋ねても、温かく、丁寧に、的確にご指導や、アドバイスをくださいます。とてもありがたく、またがんばろうという思いになります。

保健室での対応を始め、健康診断等の行事など、初めて経験することを、昨今のコロナ禍の中で実施しなければならず、それだけで精一杯になってしまう時もあります。そんな時でも、先生方が私に温かく接し、励ましてくださっているように、児童に温かく接し、いつも笑顔を届けていく存在であり続けたいです。